

サムエル記下 20 章 4~26 節

2025 年 11 月 26 日(水)

はじめに

本日の 20 章 4 節から 26 節までは、ダビデが「シェバの反乱」を制圧し、ダビデ王国の支配体制を確立したという記事です。そこで興味深いのは、「シェバの反乱」がどのようにして制圧されたか、ということです。ここでは、わたしたちの思いを超える仕方で起ったということを共に学び取りたいのです。

I サムエル記下 20 章 4~26 節の話の流れ。

早速、サムエル記下 20 章 4 節から 26 節までの話の流れを見てみましょう。ここは全体で 5 つのエピソードから成っています。

- ①まず 4 節～5 節。ダビデは「シェバの反乱」を鎮圧するため、軍の司令官アマサにユダの人々を動員するように命じました。しかしアマサはそのことにてこずったようで、定められた期日に戻ってきませんでした。
- ②そこで 6～7 節。ダビデはアビシャイに家臣団と手勢を率いてシェバを追跡させました。
- ③8～13 節。ここはヨアブが、アマサと「ギブオンの大岩」という所で、出会い、彼を剣で刺殺したという暗殺事件が語られています。
- ④14～22 節。ここは「シェバの反乱」の制圧の記事です。ヨアブの軍が、アベルという町を包囲し、その中にいるビクリを捕えようとしていた場面です。ところが城壁を破壊する作業を始めると、アベルの町の「知恵のある女」が出てきて、ヨアブたちの戦争目的を問い合わせします。戦争目的が町の破壊ではなくシェバを倒すことがあるのを知ると、彼女は、町のすべての民のところに行って説得し、シェバを斬首し、その首をヨアブに投げて寄こしました。ここでは「知恵のある女」の活躍が光っています。

ヨアブたち軍人は、城壁を壊して、アベルの町に侵入し、数々の市街戦を行い、シェバを討ち取るというイメージであったと思われます。軍人にとっては血沸き肉躍る作戦行動です。しかしそのような大袈裟な軍事行動は必要ないということを、「知恵のある女」は示したのです。聖書にはこのような事例がいくつも出てきます。代表的なのは、敵の戦車部隊の隊長シセラをヤイルの妻が「こめかみに釘を打ち込んだ」ということでしょう。(士師記 4 章 21 節)。世俗の国家は軍事力を誇り、また武具を誇ります。したがって戦争に魅了されているといってよいかもしれません。しかしイスラエルはそのような軍事力を誇らず、軽蔑しています。必要なのは、知恵なのです。以上のことが本日の学びのポイントとなります。

- ⑤23～26 節、こうしてダビデは「シェバの反乱」を制圧しました。「ダビデの重臣たち」という小見出しがありますが、これはダビデ王国の支配体制が確立したことを告げるものです。以上を箇条書きにします。

- ①4～5 節 ダビデ、ユダの人々を動員するためアマサを派遣する。
- ②6～7 節 アマサが定められた期日に戻らないため、アビシャイにシェバ追撃を命じる。
- ③8～13 節 ヨアブ、アマサを暗殺する。
- ④14～22 節 ヨアブ、シェバを倒すためアベルの包囲戦を行うが、アベルの町の知恵ある女

がシェバを斬首し、その首をヨアブが投げて寄こす。

⑤23~26 節、ダビデ王国の支配体制。

II. サムエル記下 20 章 4~26 節の解説

【4~5 節】

ダビデ王は、「シェバの反乱」を鎮圧するため、ユダの人々を軍隊に動員しようとします。そのため、全軍の将軍であるアマサが派遣されます。彼は三日のうちに動員するように命じられました。しかしあマサは、定められた期限に戻って来なかつたのです。おそらくユダの人々を動員するのに手間取ったということでしょう。これは、アマサが「アブサロムの反乱」の時、イスラエルの諸部族と共にアブサロムの側の将軍だったため、ユダの人々は彼を信頼しきれないということだったのかもしれません。

【6~7 節】

そこでダビデ王は、改めてアビシャイにシェバの追跡を命じるのです。理由は、「シェバはアブサロム以上に危険だ」からです。要するに、シェバはイスラエル諸部族の反ダビデ勢力を糾合し、本格的な戦争を起こしかねないからです。そのため対応に遅れが生じると、「シェバが砦の町々を見つけて我々の目から隠れる」かもしれません。そうなれば「反乱」は長引きます。その結果、イスラエル諸部族とユダ族から成る一つの神の民イスラエルを形成することにはなりません。そこでダビデは、急いでアビシャイを派遣したのです。シェバが仲間を増やす前に制圧したいからです。

【8~13 節】

さてそのようにアビシャイが手勢を率いて進軍し、ギブオンに来た時のことです。アマサが彼らの前に現れたというのです。この時、アマサがどういう状況であったのか、聖書は詳しく語っていません。果たしてユダの人々の動員に成功したのか、そうではないのか、そのことも分かりません。ここでは、ヨアブがアマサに会って、挨拶をする振りをして、彼を剣で刺殺した、ということだけが語られます。

ヨアブはダビデの姉ツェルヤの息子であり、アマサはダビデの姉アビガイルの息子です。ですから甥っこ同士なのです。だからアマサはヨアブに対して警戒していません。またヨアブにしても、明確に殺意があったとはいわれていません。聖書は「ヨアブが前に出ると、剣が抜けた」というのです。不思議な言い方です。ヨアブが剣を抜いたとは言っていません。ここで見つめられているのは何でしょうか。それは、武器が人間を支配する様ではないでしょうか。剣が人間を支配し刺殺させている、ということではないでしょうか。しばしば剣や拳銃をはじめとする武器は中立なものであって、それを使う人間が問題であるといわれます。しかし果たして武器は中立なのでしょうか。武器とは、殺意が純粋な形をとったものであって、決して中立ではありません。その意味で武は汚れなのです。実際、わたしたちも日常生活の中で包丁を手にすると、その切れ味を試したくなります。そのように武器には人間を誘導する力があります。ここに聖書が武器を忌避する理由があります。

しかしこのようなモノが人間を支配しコントロールするという事態も、神は御心のままに用いていくのです。それは続きを見ると、分かります。

この暗殺の後、アマサの遺体が道端にあつたため、兵たちは立ち止まってしまいます。そこである兵がそれを取り除きました。「アマサが道から除かれると、兵は皆、ヨアブの後についてビク

リの息子シェバを追跡した」とあります。「アマサの遺体」といわず、「アマサ」という人間を指しています。したがって具体的なことは不明ですが、アマサは「シェバの反乱」を鎮圧するというダビデ王の意向にとって障害であったということではないでしょうか。

【14~22 節】

このようにしてヨアブ率いるダビデ軍は、シェバを追跡しました。シェバは、「イスラエルの全部族を通って行って、ベト・マアカのアベルまで来ていた。」これは、おそらく反ダビデにくみする者を動員しつつのことであったと思われます。というのは「選び抜かれた兵士全員が寄り集まり」シェバに従ったとあるからです。こうして彼は、アベルに到着したわけです。明らかにシェバは、アベルという町を拠点にダビデ軍と戦うつもりであったのでしょうか。

そこでヨアブ率いるダビデ軍は、アベルの町の城壁と同じ高さに壘(土を積み重ねて造った城や拠点)を築き、攻城槌などを使って町に侵攻しようとしていました。もしそれが成功すれば、ダビデ軍とシェバ軍との市街戦となり、家々が焼かれたり民間人の被害が出たりします。

そこでアベルの町から「知恵のある女」が出てきて、ヨアブと交渉します。彼女は、アベルの町の代表のような存在です。「『アベルで尋ねよ』と言えば、事は片付いた」とあるように、アベルには知恵のある者たちが多く、知恵によって物事を解決することができる町だったようです。それゆえに「平和を望む忠実」な町、「イスラエルの母なる町」でもあったようです。

さてこの「知恵のある女」が、ヨアブ率いるダビデ軍は町を滅ぼすために来たのか、と尋ねます。戦争目的を問い合わせたのです。それに対してヨアブは、町の破壊が目的ではなく、ビクリの子シェバがダビデに反乱を引き起こした。シェバを引きわしてくれれば、軍は撤退する、といいました。すると、知恵ある女は、シェバの首を城壁の上から投げ落すと約束しました。

こうして彼女は、アベルの町のすべての民に事情を話し、シェバを斬首し、その首をヨアブに投げて寄こしたわけです。

以上のようにして「シェバの反乱」は終結したわけです。ここには、戦好きのヨアブに対して知恵が優ると言うメッセージがあります。ヨアブがシェバの首をとり凱旋するといったことなくなりました。イスラエルの国は世俗の国家のように武力で国を堅固にしていくのではなく、知恵によって堅固にしていくのです。

【23~26 節】

ここには「ダビデの重臣たち」の名前があります。前回のテキストと比べます。

サムエル記下 8 章 15~18 節では次のようにいわれていました。

15 節 ダビデ王の統治について：その民すべてに裁きと恵みの業を行った。

16 節 ツェルヤの子ヨアブ：軍の司令官

アヒルドの子ヨシャファト：補佐官

17 節 アヒトブの子ツアドクとアビアタル：祭司 ダビデの息子たち：祭司

セラヤ書記官

ヨヤダの子ベナヤ：クレタ人とペレティ人の監督。

本日のサムエル記下 20 章 23~26 節では次のようになっています。

ヨアブ：イスラエル全軍の司令官、

ヨヤダの子ベナヤ：クレタ人とペレティ人の監督。

アドラム：労役の監督官

アヒルドの子ヨシャファト：補佐官

シェワ：書記官

アヒトブの子ツアドクとアビアタル：祭司 ヤイル人イラ：ダビデの祭司

この両方を比べてみると、以下のことが分かります。

①本日の箇所には、ダビデの統治についての記事がない。

②ヨアブが全イスラエルの司令官になっている。

③労役の監督官がある

①については、省略したと考えられます。本日の箇所でも「ダビデは王として全イスラエルを支配し、その民すべてのために裁きと恵みの業を行った」のです。

②については、ヨアブの地位が高まっていることがわかります。ということは、ダビデ王の統治との緊張感関係が増すということです。

③については、前回ありませんでした。おそらく戦争捕虜などで労務についた者が増えたため、と思われます。

いずれにしても、本日の記事は、「シェバの反乱」の鎮圧は、世俗的な王国のように武力によってなされたのではなく、一人の女性の知恵によってなされたのです。それは、神の民イスラエルにとってふさわしいことなのです。